る幅広いものであった。このことは全体としてみるならばこの時代のイギリスが文化的にみてヨーロッパの後進国であったこと、少なくともそこに住む人々の自意識はそうであったことを物語るものであろう。

（一橋大学社会学部助教授）

『トレヴーの辞典』

Sur le *Dictionnaire de Trévoux*

佐　野　泰　雄
Sano Yasuo

社会科学古典資料センターに入って左を見ると、革装の二折版の古書が背表紙に金の文字を輝かせてガラスのケースに勢ぞろいしている。これらの書物はフランス18世紀の辞典類で、ベール BAYLE の『歴史批評辞典』全5巻（1734年版）、ディドロ／ダランベールの『百科全書』本文全17巻（1751-1765年）、図版全11巻（1762-1772年）、補遺全4巻（1776-1777年）、索引全2巻（1780年）、『トレヴー Trévoux の辞典』全8巻（1771年版）を数え、やはりそこに配架されているデュヴェルギェ DUVERGIER の法令集（八折版、全60巻、索引2巻）を含めて、同センターに所蔵される資料の豊かさを窺わせる内容である。

フランスの古典期のテクストを読む場合、これらの辞典はいずれもそのコン・テクストを示し得る、ないしはプレ・テクストとしてそれに紛れ込んでいる可能性がある故に非常に役に立つことが多いのだが、テクストの一義的な意味の読解ということになると、これら三種の書物のうち言葉の辞書である色彩の最も濃い『トレヴーの辞典』の有用性が抜きんでている。

では同時代人から「われわれの国語が持つもっとも広範で完成されたもの(1)」と言われた、この『トレヴーの辞典』（初版1704年二折版全3巻）はどのようにして生まれ、どのように時代と関わってきたのだろうか。

フランス語の辞典がそれまでのラテン語・俗語対訳難語解説集の域を脱して、今日われわれが使う意味での辞典の形を取り始めたのは16世紀のことである。16世紀といえばフランス・ルネッサンスの世紀であり、法律文書にフランス語の排他的使用を義務づけたヴィレ・コットレ Villers-Cotterêts 王令（1539年）にみられるように国語としてのフランス語が意識され始めた時代であるから、この時期にフランス語の辞典編纂法が新たな転換期を迎えたことはむしろ自然なことであった。ロベール・エチエンヌ Robert ESTIENNE が上記王令の布告と同年1539年に著した『仏羅辞典 Dictionnaire français－latin』、最初のフランス語辞典と言われる、ジャン・ニコ Jean NICOT の『フランス語宝典　Trésor de la langue française』（1606年）がこの時期を代表するものであろう。

続く17世紀はよく知られているように、フランス語の規範化が行なわれた時代である。その総括を行なうかのように世紀末に大辞書が三種現われる。リシュレ RICHELET の『フランス語辞典　Dictionnaire français』（1680年）、フュルチエール FURETIÈRE の『総合辞典 Dictionnaire universel』（1690年）、『アカデミー・フランセーズの辞典 Dictionnaire de l'Académie française』（1694年）がそれである。競合するこれらの辞典はその内容を異にしている。まずリシュレのそ

れは古語、方言、俗語、新造語、技術語を排して、フランス語の「美しき用法」を打ち立てることを目指す。用例は17世紀の大作家たちから採られている。一方、アカデミーの辞典は、古典主義の理想的人間像である「紳士 honnête homme」に許される語彙のみを精選して規範化することに意を用い、リシュレの傾向を更に徹底させて採用語彙を制限している。そしてフュルチエールの『総合辞典』。これがこの三種のなかでは最も稔り豊かな書物だ。『フランス総合書誌Bibliothèque française』(1741年)の著者でやや後代に属するグージェ GOUJET もこの書を評して次のように言っている。「彼の辞典はわれわれの国語を理解するために必要な全てが見いだし得る宝典である。[中略]使えば使うほどその豊かさと有用性がわかって来る(2)。」このような評価は、フュルチエールが偏狭な規範主義者ではなく、その時代の言葉の状況の証人たるべく努めたことによるものであろう。豊富な語彙、秩序だった的確な語義説明のみならず、例えばその副題『新旧の全フランス語彙、技芸学術の用語を包括する』が示すとおり、他のふたつの辞典とは異なって技術的専門的な語彙が積極的に採用されており、用例も、文芸作品に比べてデカルトやメルセンヌらの自然学の理論家のフランス語の文章、ハーヴェイなどの科学者の翻訳が目につく。来るべき18世紀はまさしく技芸学術の世紀であって、その集大成たる『百科全書』はそうした新しい精神によって紡ぎ出された世界の目録なのであるが、フュルチエールの視野はその流れを開くものであったということができよう。

先ほどの『フランス総合書誌』でグージェは古典期のフランス人らしい、無邪気な自負とともに「われわれの国語はそれが到達しうる最高の完成度に今日ほぼ達したのであるから、当代の辞典の語義決定は遠い後代のわれわれの子孫にもなお導き手として役立つだろう。少なくともフュルチエールやトレヴーの辞典[中略]にはそれを期待できると思う(3)」と述べている。勿論事実は彼の楽観を裏切って、言葉はそれまで変化してきたようにそれ以後も変化していき、トレヴーやフュルチエールは時代を越えた普遍性は持ちえない。しかし逆に言うならばこれらの書物はその時代のみに有効な言葉の目録であるが故にこそ、その時代に関する有益な情報を与えてくれるのである。18世紀のテクストを読むに際して、フュルチエールを元に改訂を重ねたトレヴーの有用性はそこにある。

トレヴーのリプリント版は刊行されていないが、版を重ねた上に発行部数も多いので、1771年の決定版を特に望むのでなければ、現在でもオリジナル版を比較的簡単に手にいれることができる。わが国でもこの辞書を持っている研究者もそう稀ではない。ここでトレヴーにまつわる話をひとつ。

ある大学院生がいた。常々教師たちや先輩たちから古典期のテクストを読む上で、トレヴーが不可欠であることを聞かされており、それは学校の研究室にあるこの辞書を実際に使って自分で確かめていた。19世紀以降の辞書を参照してもどうも釈然としない箇所が、トレヴーにある的確な語義によって明瞭になる、というようなことが珍しくなかったのである。博士課程への進学を機にこの辞書を買おうと決心する。ある古書店へ問い合わせると1743年版が3,000フランという返事。当時は1フランが50円ぐらいで、彼にとっては決して安い買い物ではなかったが、何とか都合をつけて注文し、2ケ月ほどしてカーキ色の郵袋二袋に入ったトレヴーが届いた。本文6巻に1752年の補遺1巻がついたもので、マリア会神学校(Scolasticat--Société de Marie)の蔵書印が押してあり、これがどこから出たかがわかる。さてしばらく後、彼がこの辞典を引いていると、

ページの間に何かが挟まっているのに気づいたのである。B5版ほどの黄色くなった紙１枚の裏表に、やはり褐色に色あせたインクで小さい文字が几帳面に書きつけてある。文章が途中から始まり、また途中で終わっているところを見ると、もともと何枚かあったもののうちの１枚であるらしい。読んでみると、「夕食」後散歩が提案され、婦人たちが貧者のもとを見舞うというような内容だった。慈愛深き名流婦人の慈善活動の描写ででもあるのだろうか、とその時には思ったにすぎない。

何年かのち、いま彼は18世紀小説の傑作、ラクロの『危険な関係』を読んでいる。何度か dîner という語に出会い、それを彼は現義通り「夕食」と解してきたのだが、何だか妙だぞと思い始める。「夕食」後に婦人たちが野外に馬車で散策に出かけるなど、その行動が夕食後という時間に馴染まないからである。そこで彼はトレヴーを引いてみる。と、そこには語義として「日中のほぼ中間で取る食事」と明記してあって、それ以外の定義はない。そうか、dîner とは古典期では昼食を意味したのか。彼はそれまで知らずにいたことに恥入ると同時に突然、自分のトレヴーに最初挟まっていた例の手稿（？）のことを思い出す。あの紙切れはどこに紛れ込んでしまったかもう無いが、『危険な関係』の一節、背徳的誘惑者ヴァルモンの手管の描写（手紙23の前半）だったのだ！ それにしても、殆どポルノグラフィーに近いものと思われていたであろう『危険な関係』と修道会神学校とは何と奇妙な取り合わせだろう。神学校以後に例の紙片が紛れ込んだ可能性をも含め、彼はこの取り合わせについていろいろ考えてみるのである…

この余り面白くない話を読んで、「昼食」という語義を見つけるのなら別にトレヴーを見なくても日本の中辞典クラスで充分間に合う、と反論があるかも知れない。確かに少し詳しい仏和辞典なら、古語・方言としてこの語義を見いだせよう。けれどもこれでは、問題の語が古典期に「昼食」の意味でのみ使われ、「夕食」の語義は存在していなかったことの保証にはならない。18世紀にはこの語は昼食の意味しか持たなかったことを示すトレヴーの記事は、だからきわめてつぼを得た証言と言うことになる。もちろん現在刊行されている大辞典クラスの仏仏辞典なら、各語義の初出の指示とともに全語義が通時的に並んでいるはずであるから、有益であることに間違いない。しかし現代人の仕事ゆえ古い語義の区分に精密さが欠ける傾向があることも否めない事実である。ところが当時の「現代用語辞典」であったトレヴーにはこの心配が無い。当時の知のありようをそのまま反映させた語義が丹念に整理されているからだ。それにこれは趣味の問題だが、トレヴーには当時の「道具」に直に触れるという感官の喜びがある。おまけに例えば dîner の記事中には、17世紀のフュルチエールからそのまま受け継がれている「石工は10時、修道僧は11時、庶民は正午、書記は２時に昼食を取るものなり」というような用例があり、こんなところに当時の風俗が垣間見られるような気がするのも古い道具の功徳というべきであろうか。

『トレヴーの辞典』は『フュルチエールの辞典』の剽窃から生まれた。そこには『フュルチエール』の初版及びその改訂版の刊行の経緯が絡んでいる。

自身アカデミーの会員であったフュルチエールは、アカデミーが準備中の辞典（1694年に『アカデミー・フランセーズの辞典』として刊行）と併行して、自分の辞典を編纂していた。ところが彼がアカデミーの辞典の編纂にも携わっていたことが問題になるのである。アカデミーは彼の辞典が刊行準備中であるのを知ると、剽窃の非難を浴びせ訴訟を起こす。われわれが比較しても明らかなようにアカデミーの辞典とは完全に別種のものであったにもかかわらず、既に得ていた

刊行許可状を取り上げられてしまう。それでもフュルチエールは仕事をやり遂げ、彼の辞典はその死後2年たった1690年、ようやくオランダで刊行されることになる。

さて、フュルチエールの辞典を出版させたのは、『歴史批評辞典』の著者として本稿初めにも名をあげたフランス人ピエール・ベールである。プロテスタントであった彼は1685年のナント王令廃止（フランス国内のプロテスタンティスムの完全な禁止令）前後の激動期にオランダのロッテルダムに亡命、同様に亡命してきたフランス人プロテスタントとともに、旺盛な執筆活動を展開していた。この時期の仕事としては、全ヨーロッパ的な書評誌『文芸共和国便り』（1684-87年）、宗教的寛容論の傑作『哲学的注解』（1686-87年）がある。当時のオランダは出版活動の楽天地であり、例えばフランスで出版できない書物も、これをオランダで刊行してフランスへ密輸するというようなことが頻繁であったが、フュルチエールの辞典の刊行はこうした状況を背景としていたのである。

この時期、オランダのフランス人亡命プロテスタント集団は二つの派閥に分かれていた。いかなる宗派も政治的な迫害の対象としてはならぬという、いわゆる寛容派と、そうした全的寛容に制限を加えようとする非（半）寛容派である。（この両派の抗争は当時のオランダの政治状況や亡命プロテスタントの対フランス戦略と絡んで複雑な様相を呈する。）ベールはその著からもわかるように寛容派の領袖であったが、その盟友に同じく『諸宗派の寛容について』（1684年）を著したバナージュ・ド・ボーヴァル Basnage de Beauval という人物がいた。1701年、フュルチエールの辞典に大幅な改訂を加えて第2版として刊行したのはこのバナージュなのである。

ところでその改訂加筆部分に執筆者の「党派性」が顔を出すのは致し方無いことであろう。ここで例として「寛容 tolérance」の項目を取り上げてみよう。1690年の初版では語義及び簡単な用例が計5行にわたって記されているに過ぎない(4)。ところが第2版ではそのあと30行にわたって加筆がなされている。「この語は数年前から神学者の間で非常によく使われるようになってきた」で始まるこの部分は、寛容の限界に関するプロテスタント神学者たちの論争紹介の後、オランダのプロテスタント諸派は英国国教会内におけると同じく相互的に寛容すべし、と結ばれていることからもわかるように、プロテスタント色が濃厚なのである(5)。

こうしたオランダ版フュルチエールの党派性が、フランス本国のカトリック陣営の気に染まなかったのは想像に難くない。フランス中東部の町トレヴーを拠点とするイエズス会士たちは創刊したばかりの書評雑誌『トレヴー通信』Journal de Trévoux でこれを攻撃（1701年）(6)、1704年にはバナージュのフュルチエール第2版をもとにカトリックの色付けをしたトレヴー版フュルチエールを刊行してしまうのである。ためしに上にあげた「寛容」の項目がどのように改竄されたか見てみよう。最初の5行は変化無し。ところが加筆部分に入るとまず先頭の文が「この語は数年前からプロテスタントの間で非常によく使われるようになってきた」と変わり、以降「バナージュ氏及び他の人々によれば」としてオランダ版フュルチエールから流用した記事を切り張りしながら、その隙間をカトリック的論述で埋め、結局、プロテスタントたちはその聖書の自由検討の原理からして寛容を認めないわけにはいかないだろうが、寛容の限界を確定する問題については、外的権威によらぬ個人の自由検討という「改革派の原理にしがみついている限り、決して意見の一致を見ないであろう」（記事最終部）という論旨に纏められてしまうのである(7)。

トレヴーのイエズス会士たちはこのようにオランダ版フュルチエールの党派性を「補正」したのだった。以後『トレヴーの辞典』と呼ばれることになるこの書物は、フュルチエールの名もバナージュの名も冠しておらず、まったく別の辞典のような体裁を取っているがゆえに剽窃の非難

を浴びる。確かにこれが「剽窃」であったことは事実である。けれどもカトリック陣営にしてみればもともとカトリックのものであった『フュルチエール辞典』（フュルチエールは身分としては聖職者階級に属していた）をオランダの亡命プロテスタントから取り返したつもりだったのかも知れない。

1743年に大幅な増補改訂を施した第4版を刊行、1752年の第5版を経て、1771年の第6最終版へと『トレヴー』は言葉の辞典としてますます充実の度を加えて行く。けれどもカトリックのイデオロギーの枠内にあったせいか、『百科全書』などに較べると当然思想的立ち遅れは隠せない。例えば後者の項目「寛容」（第16巻1765年）が高らかに信教の自由をうたっているのに対して、トレヴーはそれは1771年版ですら基本的には上で紹介した内容を踏襲しているのだ。但し、そのトレヴーも1771年には、上で問題にした加筆部冒頭を「この語は寛容論者の数が増すにつれて、非常によく使われるようになっている」と書き直さざるを得なかったのである。カラス事件（1762年）、ヴォルテールの『寛容論』（1763年）、寛容王令（1787年）を経て人権宣言へとつながっていく時代の流れが刻印されているということなのだろう。 (26／12／1988)

注

(1) Claude-Pierre GOUJET, *Bibliothèque française ou Histoire de la littérature française, etc.*(1741－1756), t. 1, 1741. p. 257. Slatkine Reprints, 1966 による。

(2) *Ibid.*, p. 250.

(3) *Ibid.*, p. 241-242.

(4) Antoine FURETIÈRE, *Dictionnaire universel contenant généralement tous les mots français, tant vieux que modernes, et les termes de toutes les sciences et des arts, etc.*, La Haye et Rotterdam, 1690. SNL－Le Robert, Paris, 1978 による。

(5) Id., *Dictionnaire universel…, augm. p. Basnage de Beauval et revu p. Brutel de La Rivière,* La Haye, 1727. Georg OLMS Verlag, 1972 による。

(6) *Journal de Trévoux,* n° Mars et Avril, 1701. art. 13. Slatkine Reprints, 1968による。

(7) *Dictionnaire universel française et latin, vulgairement appelé Dictionnaire de Trévoux,* Paris, 1743 による。

（一橋大学法学部助教授）

展示紹介
―モンテスキュー生誕300周年、フィランジェーリ没後200周年に関連して―

社会科学古典資料センターでは1987年6月から『一橋大学ニュース』紙の「本学貴重書紹介」欄の連載と並行して、所蔵文献資料の展示を随時行ってきた。ここでは、そのなかから、1989年がモンテスキュー生誕300周年、また1988年がフィランジェーリ没後200周年にあたることにちなみ、2つのトピックをとりあげてみたい。